九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

不信のシステム : バジョットのフランス第二帝政論

遠山, 隆淑
国立熊本高等専門学校共通教育科 : 准教授

https://doi.org/10.15017/2231020

出版情報：法政研究. 85 (3/4), pp.561-588, 2019-03-08. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

不信のシステム

――バジョットのフランス第二帝政論

遠山隆淑

はじめに
第一節　クーデタの擁護
第二節　第二帝政の不安
第三節　不信のシステム――第二帝政の政治秩序
第四節　第二帝政の崩壊
むすび　フランス政治の将来

はじめに

一八五一年八月、二五歳のバジョット（W. Bagehot: 1826-77）はパリへ赴いた。ロンドン大学卒業後、数年間取り組んだ法曹への道を断念して陥った不安の気晴らしも兼ねた訪問で、翌年の八月まで滞在した。そこで彼は歴史的大事件に遭遇することとなる。ルイ・ナポレオンのクーデタである。[1] バジョットは、渡仏以来、直接肌で感じた体験を「一八五一年のフランスクーデタに関する書簡」（以下、「クーデタ書簡」と略称）と題して、『インクワイアラー』に七回にわたって寄稿した（五二年一月―三月）。この一連の経験の中で彼は精神的に回復して、家業の銀行経営に携わるとともに、評論活動に向かうこととなる。

若き日のクーデタ体験は、バジョットのその後の評論活動に大きな影響を与えた。彼は生涯、ナポレオン三世を中心とするフランスの政治情勢に強い関心を寄せ続けたのである。[2] 加えて、バジョットが評論活動を行った期間は、第二帝政期（一八五二―七〇年）とほぼ重なる。これらから、『イギリス国制論』（六五―六七年）や『自然科学と政治学』（六七―七二年）などにも結実した彼の政治的思考は、帝政の動向を横目に、それをイギリス議会政治理解の鏡にして展開されたと言える。この意味で、バジョットの政治思想において第二帝政論が占める位置はきわめて重要であり、それを正面から検討することには意義がある。[3]

本稿の目的は、その第二帝政を、秩序維持に対する国民の信用の欠如を基底的な条件に形成された「不信のシステム」としてバジョットが解釈し論じたということ、ならびにそのシステムのしくみに対する彼の理解を明らかにすることである。[4] 銀行経営者の家系に生まれ、金融論の古典『ロンバード街』（七三年）も著したバジョットは、政治的な評論においても「信用（trust）」に注目して、政治支配に対する国民の心理的側面を強調した。たとえば、選挙が成立するためには、有権者が他の有権者を「信用していることを考えもせず信用している」ことが不可欠だと論じているように、

信用は議会政治自体の前提条件ですらあった（Bagehot [1865-7, 72: 369, 271]）[5]。彼の有名な信従社会論もこれに当たる。ただし、信用という言葉の意味は漠然としているため、彼の政治論を検討する際それだけに注目するなら、服従の調達の指摘にとどまり、それが実際にどのように機能して、議会政治をどのように具体的に形成したのかを見いだすのは難しい。たとえば信従の態度は階級ごとに細かく異なり、その多様な在り方に対応して特殊なイギリス国制が構成される（遠山 [2011: ch. 4]）。このような観点から、本稿では、政治支配の維持に対する国民の信用がきわめて低い体制だとバジョットが見なした第二帝政に関する論考に焦点を当て、その場合にどのような政治秩序が形成されると彼が考えたのかを考察する。

バジョットは、イギリス本国の論調とは異なり、クーデタを擁護した。第一節で論じるように、その理由はフランス人の国民性ゆえの歴史的経緯とクーデタ直前の国民の危機的な精神状態にあった。この危機を打開して皇帝となったのがナポレオン三世だが、バジョットは、その特殊な「個人的支配」ゆえに長期の秩序維持が困難だと考えた。第二節では、この「個人的支配」とそれに対する国民の不信に関する議論を検討する。第三節では、国民の不信を前提に形成された「不信のシステム」を、バジョットの様々な論考から描き出す。第二帝政は、周知のように普仏戦争で崩壊した。第四節で明らかにするように、彼はその原因を、「個人的支配」がもたらした中間組織としての官僚組織の空洞化に見いだした。この中間組織の問題は、フランス議会にも及んでいた。最後に、帝政下の議会の動向をめぐるバジョットの議論に注目することで、帝政後のフランス政治に対する彼の見通しを分析する。これらの作業を通じて、バジョットの第二帝政像を浮き彫りにして、政治秩序の継続に対する国民の信用が、政治体制の形成に果たす役割に関する彼の理解を明らかにする。[6]

第一節　クーデタの擁護

四八年の二月革命で七月王政が倒された後、憲法制定議会に選出されたルイ・ナポレオンは、一二月の大統領選に大勝し、「皇太子大統領」と呼ばれるようになった。しかし、任期は四年、連続再選が禁止されていた。また、ナポレオン一族であり、若き日の二度のクーデタの失敗などで長年の亡命生活を余儀なくされていた彼には、議会に支持基盤がなかった。そのため、正統王朝派の秩序党に基盤を持つバロー内閣が、大統領の指示に従わない状況が続いていた。そうした中、特に農民層を中心に国民の支持を得ていたルイ・ナポレオンは、この手詰まり状況を打開すべく、五二年の任期切れまでにクーデタに打って出るだろうという予測が、国民的な関心事になっていた。

バジョットが訪れた五一年八月のパリは、このような緊迫した情勢の中にあった。実際、その四ヶ月後にクーデタは勃発し、彼はそれを「クーデタ書簡」で報告することになる。本節では、この書簡に注目してバジョットのクーデタ擁護論を分析する。

第一書簡でバジョットは、クーデタが、「自由の木を切り倒し薪に」変え、「国有建造物から『自由・平等・友愛』の文字を消し」てしまった大惨事だと批判するイギリスの世論に理解を示しつつも、そうした評価は「まったくの誤り」だと断じた。彼によれば、大統領は「強力で人気を博して」おり、「ほとんどの下層民」が「ナポレオンの御代」を祝福していた（Bagehot［1852: 30］）。

イギリス世論の誤解は、ナポレオンの「当座の独裁」と「それ以後の継続的な独裁」との混同に起因する、とバジョットは考えた。将来の独裁は別にして、「ただちにクーデタへと直結した民衆の精神状態」を考えれば、「倫理的評価」は本質的ではなく、クーデタは「正当化」を免れない（ibid）。

バジョットによれば、大革命以後のフランスでは、「自由な統治」（イギリス型の議会政治）樹立の試みが相次いで失

敗に終わった。その理由は、フランス人の「国民性」にあった。

> フランス国民性の本質は、流動性、すなわち、……「今このときの気持ちに対する」一定の「過度の感受性」です。この感受性は「軽率」にもなります。なぜなら、軽率は、確固たる原理を後回しにして、一時の誘惑やその場かぎりの気まぐれ、そして時おり「短気」を生み出すからです。さらにこの短気が、目の前にある悪を実際よりも苛酷なものに感じさせ、しばしば「興奮」へと到るのです。……その結果、昔からの慣習を目の前の緊急事態のために犠牲にして、さらに好ましくない別の性格上の性質を生み出してしまいます（ibid., 55）。

このような国民性の政治的帰結が、「一七九一年憲法」や、「一八三〇年体制」、「第二共和政」などの「失敗」に代表される、大革命後に国民に降りかかった「多くの災難」であった[7]（ibid, 54）。

バジョットは、フランスで議会政治が不成功に終わる理由を、国民内部における「複数のシステム」の「分断」から生じる秩序形成の難しさに求めた。

> もし、移り気で賢明、様々な事柄に関心を持ち、知的で、自説を譲らない国民に対処せねばならないとすれば、互いに反発しあう複数のシステムを持つことは避けられません。そこではすべての人たちが、自らの言葉で語り、自らの目で見て良さそうなものを選挙民に示します。……そこには、大量の気まぐれな理論や、哲学的に無意味なものがかなりの高確率で存在しています。ちょっとした陰謀を実行する多くの機会が、また魅惑的な利己主義がそこにはあり、平穏の味方たちが、悲劇的に分断されているのです（Bagehot［1852. 67］）。

その結果、「国民の精神が興奮状態になると、波風が立つごとに民衆は街頭に出て右往左往し、不満顔の労働者たちがあちこちで群れを作り、痩せこけた顔立ちと怒りの身振りで、現実の苦しみと想像上の不平不満について論じ合う」ことになる（ibid）。

しかし、七月王政の場合には、まがりなりにも「一八年間」もの平和が維持された（ibid., 25）。国民内部の対立の激化を抑制して、非妥協的な諸システムを単一のシステムにまとめ上げたのは、「統制された腐敗のシステム」であった。

> 彼［ルイ・フィリップ］は、実際的でそれほど感傷的ではない役人だったので、市場へと入っていき、十分な数の選挙民と同志を買い入れました。もちろん、「礼儀作法」は慎重に維持されました。というのも、あらゆる種類の粗野は、フランス人の懐疑主義には非常に耳障りだからです。手付け金は単なる金銭ではありません……。もっと礼儀正しい品物、つまり、政府の官職なのです。……ある人は「市長」になることを望み、またある人は、自分の息子をサンシール陸軍士官学校か工芸学校に入れたいと考えました。これらは政府が立てた候補者への投票によって得られ、それは日常茶飯事のことでした（ibid., 67-8）。

ルイ・フィリップは、選挙における買収を通じて、つまり、物質的利益を媒介にして、国民内部の分断を抑え込んだのである。

この「腐敗のシステム」は、「好調な商業に牽引されて非常にうまく機能した」にもかかわらず、「結局は単なる暴動」に終わった。それが二月革命であり、そこからクーデタも勃発した（ibid., 68）。

バジョットは、一八五一年のクーデタ直前の社会状況を大革命後の歴史の中でも特殊なものと見なした。大革命後には、別々の政治観を持つ諸陣営の非妥協的対立が生じた。これに対し、クーデタ直前は、それがいつでも勃発しかねない特殊な状況にある中で、将来に対する民衆の不安や予想される政治的激変に対する恐怖心がパニックを生み、政治秩

序そのものの解体の危険性が高まっていた。

ある国が一定期間内に起こる革命を予期することなど、非常に稀なことです。実際、おそらくいかなる国においても、通常は庶民が革命を予期することなどありえません。物事を深く考える人々は先の見通しを立てるでしょうが、大衆は、今日という日が大して豊かでなくても、少なくとも明日も今日と変わらない、と考えます。しかし、いったん革命の期日が決められると、状況は一変します。将来を見越して考えることから縁遠い人々は、目前に迫った事件の結果を必ず大げさに考えるものです。とにかく、五週間前［五一年一二月初、大統領任期切れ直前］のフランスでは、小売店主たちは、五二年五月のことを、まるでこの世の終わりであるかのように語っていました。……間近に迫った政治的解体の恐怖は、どんなに些細なものであろうと恩着せがましくその恐怖を押しつけてくるものだ、ということは彼らには想像できないのでしょう。……そうして、取り引きが不振になるので、商売人はますます恐怖し、彼らが恐怖するのであらゆる取り引きが不可避的に悪化していきました（ibid., 31-2）。

このようにバジョットは、フランスにおける政治体制の成立基盤を、体制に対する民衆全般の信用の観点から捉える。民衆はより長期の秩序を保障する政治体制を望む。この点から見れば、クーデタ直前の第二共和政は、取り付け騒ぎ寸前の信用度のきわめて低い体制であった。だからこそ、まずは政治秩序を創出して、統治に対する信用を回復することこそが喫緊の課題であった。

政府の第一の義務は、社会生活と洗練された教養との条件である産業の安全を保障することです。……また、特にフランスのような激しやすい国においては、……いついつまでに暴動が起こるぞ、とフランスのみならずヨーロッパ中が懸念している中で、革命的労働者が半年もの間、物乞い状態にあることほど危険なことはない、と私が主張することをお認めいただきたい。公正な手段か

不正な手段かは別にして、ルイ・ナポレオンが解放したのは、このような状態でした。結果は奇跡的なものであり、死の時刻を宣告されたために死にかけていたのに、その時刻が過ぎたと知った途端生き返った人のようでした。フランスは、震えながら来るべき革命を待っていたにもかかわらず、それが到来して過ぎ去ったと思いきや、すぐさま復活したのです（ibid. 33）。

このような理由から、バジョットはクーデタとその後の「当座の独裁」を擁護した。彼によれば、ルイ・ナポレオンは、「最高かつ最大の賭けに興じているギャンブラーの表情」さながら、「見るからに利己的なゲーム」を楽しむようにクーデタに「没頭」していた（ibid. 38）。ここには、一個人の利己的行為が公的性質を帯びるまでに秩序が危機に瀕していた、というバジョットの状況理解が垣間見える。彼はそこに、ルイ・ナポレオンの独裁の正当性を認めたのである。

第二節　第二帝政の不安

「クーデタ書簡」後の約一〇年、バジョットは、五二年一一月に皇帝となり「継続的な独裁」状態に入ったナポレオン三世について、正面から扱った論考を残していない。彼が再びフランス政治について論じはじめたのは、六三年である。ちょうどこの時期、ナポレオン三世は、立法院選挙において野党が議席を伸ばす事態を目の当たりにして、自らに対する国民の飽きを見てとり、自由主義的な政策を推し進め、「自由帝政」として区分される支配体制への転換を図る端緒に立っていた。(8)

バジョットは自由帝政化に好意的な評価を下した。たとえば、自由帝政化の最終盤の七〇年には、国民の政治的自由の実現と帝政とが十分両立可能だと言い切り、むしろ政治秩序の安定のためにも、帝政を前提にさらなる自由化を模索すべきだと提言している（Bagehot［1870c: 147-50］）。

しかし、帝政それ自体の成立基盤についてバジョットが楽観視できたのは、六九年から七〇年前半までのごく短期間であった。ナポレオン三世という特異な人物の「個人的支配」であることに帝政の最大の弱点を看取したことが、主たる理由である（ibid., 148-9）。

この弱点は、六五年の論考に見られるように、後継者問題を中心とするものであった。たしかにフランスは、皇帝の産業振興策により「現在の物資を獲得」し、「産業界が必要とするすべてのもの」が与えられている。その結果、「フランスの信用」もこれまで維持されてきた。信用取引についてフランスの銀行家に相談してみれば、「一八四八年のことは気になさいませんね。私は気にしていません」という返事が返ってくるだろう。しかし、「これに対して、どう返答すればよいだろうか」とバジョットは問う。フランスの政治的安定や経済的繁栄に対する彼の見通しは明るくない。なぜならそれらは、ナポレオン三世によってのみ実現可能だからである（Bagehot［1865: 115］）。

> 現在の政府が明らかに頼りきり権力を与えている先は、当世のカエサルである。この特異な人物がテュイルリー宮を占拠し続けるかぎりにおいて、現在の政府は持続する。民主的専制君主、あるいは代表者的専制君主は、民衆の意志を言い当て、それを実行に移す才能を持っている。こうした才能が世襲されることなどあるのだろうか（ibid）。

このように第二帝政は、皇帝の政治的資質に依拠してのみ成立するきわめて「個人的な」政治体制であった。それゆえ「結局、現在のフランスの幸福は、短期だけ貸与された幸福にすぎ」ず、「その幸福は、もう若くもなく、代わりもいない、またいつも思考し、かつ実際に存在している一人の人間の寿命とともに終わる」（ibid）。

六七年の論考でバジョットは、フランスの銀行家を再登場させ、投資に対する銀行家自身の臆病さについて、「パリに住む私たちには革命があります。あなたは一八四八年にここにはいなかったでしょうが、私はいたのです」と語らせ

て、「フランス人の議論は政治的混乱についての言及から始まる」と説明を加えている（Bagehot［1867: 119］）。このように第二帝政は、その表面上の政治的安定性や経済的繁栄にもかかわらず、それらを一人で構想し実現したナポレオン三世の個人的支配ゆえ、皇帝没後の革命に対する国民の潜在的な不安を払拭するまでには至っていない、とバジョットは判断した。

バジョットは、自由帝政化により、皮肉なことに革命の危機が一層増したと考えた。六〇年代終盤には、メキシコ出兵などの対外政策の失敗もあって、帝政に対する国民の支持がさらに低下した。バジョットによれば、皇帝はこれを国民の「個人権力の否認」と捉え、批判をかわすために立法院の権限をさらに拡大したが、これにも革命の危険性があった。なぜなら、強力な権力者が「目に見えない束縛に自ら服する」ようなことは、「古代人が不可能だと考えたように」ありえず、個人的支配と立憲的な議会政治は本質的に両立しないからである。つまり、第二帝政においては「立憲君主制」は成立しない。バジョットの見通しでは、皇帝側がこのまま立法院に権力の座を明け渡すことはない。皇帝は、議会中心の統治の失敗を確信しているため、「敵の失策」の結果、再び政治的実権が転がり込むまで「待機戦術」を採っている。秩序の安定との関連でむしろ懸念すべきは、リベラルや「赤の党」など反皇帝勢力の動きである。この勢力の「暴力により、一瞬にして帝政が打倒されること」になれば、「革命と反革命」の応酬が続くことになりかねない（Bagehot［1869: 133-4］）。

革命の脅威に関しては、帝政と議会政治とが両立可能だと判断した七〇年になっても指摘されている。次節でも論じるように、ナポレオン三世は「国民投票」を自らの権力の拠り所としたが、バジョットによれば、これ自体が「帝政か革命か」を国民に選択させ、秩序の安定を保守的な農民層に選択させることを目的とした革命封じの方策として機能していた（Bagehot［1870a: 140］）。

このように、第二帝政は、ナポレオン三世という独特の個性によってのみ成立する支配体制であった。だからこそバ

ジョットが危惧したのは、皇帝没後の後継者問題であり、政治秩序の維持に対する不安が潜在的な脅威となって革命の可能性を否定できない不安定な国民の精神状態であった。帝政が崩壊し、ナポレオン三世も亡命先のイギリスで死去（七三年一一月）して一年が経過した後、彼は次のように帝政期を回顧している。

> イギリスは、いつも安全な統治を保ち続けてきたので、それがないことの悪を想像するのは困難だということがわかる。……イギリスにおける産業活動のすべては、比類なき信用と信頼に基づいている。その信用と信頼は、かすかな革命の予感によって、一瞬にして吹き飛ばされてしまう。……ロンバード街が数か月間無法者たちの手に落ちることを想像してみれば、フランス人の恐怖がどのようなものか理解できるだろう。ともかく、こうした破滅に対して、フランス国民は帝政が彼らを守ると考えた。帝政成立前には、彼らは革命を恐れた。帝政終了後、革命が再び開始された。つまり、彼らが革命勃発の不安を感じずに済んだのは、帝政の間だけであった（Bagehot［1874a: 169］）。

この議論では、第三共和政における政治的混乱との対比で、帝政期の議論よりも帝政の安定性が強調されているが、フランス国民が帝政期にも革命に対する危機感を抱き続けていたことをバジョットが幾度も指摘していたことは、これまでの議論からも明らかである。第二帝政では、そうした「信用と信頼」の欠如した中で、体制の長期的な展望を許さない「個人的支配」が二〇年近くにわたり維持されたのである。

第三節　不信のシステム——第二帝政の政治秩序

本節では、長期的な秩序維持の条件に乏しいフランス支配のために、ナポレオン三世がつくり上げたとバジョットが

考えた第二帝政成立のメカニズムに焦点を合わせる。第二帝政はまさに、「不信のシステム」と呼ぶべき支配体制であった。バジョットによれば、第二帝政が秩序維持に成功した理由は、「固定性（fixity）」に基づく支配にあった。彼は、フランスにとって第二帝政は「失敗作」などではなかったと論じ、その理由を次のように説明した。

> フランス人には、自由な思考よりも、議会政治よりも、外交上の成功よりも、大切なものがある。それは固定性である。明日も今日と同様に、来月も今月と同様に、来年も今年と同様に、同じ政府を保ち続ける保証を、彼は欲する。彼は、常に革命を引き起こす力が存在する中で生きている。彼はいつも革命の勃発を想像している。一七九三年の恐怖を聞いてきたし、コミューンの敗北を目の当たりにした。だから、革命を防ぎそれを不可能にすることができる強力かつ持続的な勢力を何よりも望んでいる（Bagehot［1874a: 169］）。

別の論考でもバジョットは、「フランスがこだわっている」こととして、「固定性」に言及し、その理由に、「絶え間ない論争」と頻繁な支配者の交代に対する国民の「忍耐力」の欠如を挙げた。ここには、討論が生み出す政治的変化を忌避するフランス人の政治的特徴が指摘されている。それは、「改革することによって保守する」というイギリス的保守性とは異なり、国民を現状につなぎ止めることで成立する支配方法であった（Bagehot［1874b: 175］）。政治秩序の保証に対する国民の不信は、「固定性」という政治的要求として現れたのである。

固定性は、革命を予防するための実力による支配に見られる。それによって、ナポレオン三世の支配は体制全体がしっかりと固定される。

> フランスでは、支配者はパリの街頭で選ばれる。民主的帝政は世襲制になるだろうとおだてる者もいるだろうが、深く観察してみ

れば、それはありえないということがわかるだろう。その支配体制は、能力においても、判断においても、本能においても、民衆を代表するのは皇帝だという考えに基づいている。しかし、そのようなことを十分に、いや半分でも十分にやってのける人物を何世代にもわたって輩出できる家系など存在しない。国民代表の性格を持つ専制君主は、ナポレオン一世やナポレオン三世のように、闘争によって選ばれる。そうした統治形態は、他の欠点はさておき、管理運営上の質や能力という点で、他の統治形態よりも期待できる。政府の指導者は最高の能力を持った人物にちがいなく、そうでないなら、その地位も、自らの生命も維持できないからである。彼は積極的に行動する。もし行動を怠れば、自らの権力や、おそらく命さえも失ってしまうことを知っているからである。その国家の枠組み全体は、革命を抑え込むために緊張しきっている（Bagehot［1865-7, 72: 334, 230］）。

このような「民主的専制」には、「民衆を完全に抑え込みながら完全に満足させなければならない」という特有の困難がある（ibid）。

この固定性はフランス国民における「平等性」の重要視に支えられている。

彼ら［フランス人］が大いに気にかけるのは、社会的平等である。それを無能力の平等と言ってもよいが、ともかく平等は平等である。帝政がこれを保証する。そして、フランス国民は、……目に見える効果を大いに気にかける（Bagehot［1863a: 90］）。

この観点から、バジョットは英仏の「国民感情」を次のように比較している。

問題は、フランスがそうした［イギリスのような］国制の採用を望まないことにある。フランスのブルジョワは現在、貴族と同程度に不人気である。平等を求める国民感情があまりにも強いので、他のすべてのことが犠牲にされるだろう。自由な統治には特権

が付随する。無教養層よりも教養層により大きな権力が与えられなければならないからである。自由でありかつ平等でもあるための方法など存在しない。フランスは後者を、イギリスは前者を選んだ（ibid., 94）。

こうしたフランス人の平等志向は、「世襲」や歴史による成果としての教養に対する拒否感と表裏の関係にある。フランス国民は平等性を基礎に政治秩序を組み上げるため、「教養層」の政治的影響力は弱く、むしろ「無教養層」に嫌悪され、国政を主導する勢力にはなりえない。その結果、フランスの世論は「議論よりも感情で動く無教養大衆」の願望が支配し、「高度にかつ論理的に判断しようとする動機」も消滅してしまう（ibid., 92-3）。

しかし、フランスの国政は、農民層を中心とする無教養層の意見に基づいて進められるわけではない。彼らは「口のきけない大衆」だからである。そのため、「民主的専制君主」が代弁者の役割を果たさなければならない。

> 民主的専制は、神政のようなものである。自らの不可謬性を前提としているのである。民主的専制君主は言う。「私は民衆の代表者である。彼らが望んでいるから、私はここにいるのだ」と（Bagehot［1865: 114］）。

このようにして、民衆の代弁者であることを自他ともに認める皇帝の全権掌握が可能となる。「ナポレオン三世に対する民衆の支持」は、「農民の無知による保守主義」に依拠しているのである（Bagehot［1870e: 159］）。バジョットによれば、第二帝政は、ナポレオン三世に「すべてが依存しなければならず、彼が全知全能の存在として動かなければ、彼の意志を実行に移すために任命された行政官による実質的な審査すらままならない」ほどであった。バジョットはこれを「カエサル主義のシステム」と表現した（ibid., 156-8）。

ナポレオン三世が、「口のきけない大衆」の指導に成功した理由は、「多数者のその時々の欲求を即座に、効率的に、

かつ完璧に具体化」できたことにあった（Bagehot［1865: 112］）。その方法を制度化したのが、第二帝政を特徴づける「国民投票」である。国民投票自体は、帝政再建の是非を問うた一八五二年一一月の投票以降、帝政末期の七〇年五月まで行われなかったが、「不信のシステム」維持の秘訣は国民投票に象徴される支配方式にあった。バジョットによれば、それは「普通選挙の極端な形式」であり、「承認された場合には、『民主的帝政』という議会に基礎を置かない国制を維持すること、ならびに、これまでと同様に国民のために骨折りを続ける」という「約束と引き換えに信任をお願いするというもの」であった。ナポレオン三世は、この約束によって「おおよその支配権を維持してきた」のだが、国民投票は、あくまでも彼個人に対する信任投票にとどまり、「習慣や慣習から成長する植物のように王朝全体の立場を強める」ような制度ではない（Bagehot［1870a: 139-40］）。この議論からは、『イギリス国制論』の「尊厳的部分」との対比を読み取ることができる。国民の「崇敬心」を喚起し、国制に対する服従を継続的に調達する役割を君主や貴族が果たしてきたのに対し、フランス皇帝は、その時々の国民からの当座の支持を不断に確認しなければならない。そうした支持の確認は、将来的な政治プランの評価ではなく、現状追認の問題であり、その反復だけが帝政を支える。バジョットは、国民投票が作り出すフランス農民層の保守性を、このような意味における「固定性」の観点から理解した。

この支持は、ナポレオンという「偉大な名前に対する大衆の漠然とした好意」に支えられるが（Bagehot［1870e: 156］）、そうした過去の栄光だけでは、国民の支持をつなぎ止め続けることはできない。バジョットは、「カエサル主義」に基づく第二帝政を、「世界史上初の真に最も洗練された民主政治」に位置づけ、「民衆の本能と結びついた絶対的な支配」が目的に掲げる「大衆の福祉」とは、「現在の群衆の現在の善」、端的には「パンと肉」の提供だと論じた。だからこそ、第二帝政は「金銭」という「権力を集中させる」ことに「そのシステムの真の原理」を置く（Bagehot［1865: 112-5］）。このように、第二帝政は、目先の生活物資の提供とその見返りとしての皇帝に対する支持との互恵関係に支えられていた。この関係の継続もまた、政治の役割を、生活必需品の提供を通じた国民の生命維持装置へと矮小化することで、フ

ランス政治社会を固定する「惰性の力」として働いた（Bagehot［1870b: 145］）。

バジョットによれば、「最大多数の現在の幸福」の実現という観点から見れば、第二帝政はフランス史上最良の支配である。しかし、同時に彼は、「支配の真のねらいと目的」は、「将来の向上」にあることを強調する。その上で彼は、言論が規制され、教養層に対する嫌悪も相まって、フランス言論界の洗練された活発な議論が民衆には届かずに、「教育機能が停止」している状況を、帝政ゆえの欠点だと批判した。加えて、皇帝と国民との関係が、将来の改善はおろか、現状維持すら不可能にするような「現在の退廃」をもたらすことに帝政の問題を見た。その惨状は、「あらゆる事柄に中央政府の支援や助け、後押しが必要とされる」ほどのものであり、その程度は「人間本性には耐えられない重荷を課す」ほどである。「現在の幸福」を求め国民の政府依存が、将来のフランス政治社会を食い物にしてしまっているのである（Bagehot［1865: 1135］）。

このように、政治秩序維持の見通しが立たないフランスでは、一九世紀の「カエサル」であるナポレオン三世が、実力の行使を背景に、国民に対して「パン」に象徴される目先の生活物資の供給を絶えず行っていく。[9] その見返りとして、皇帝に対する国民の支持が表明される。バジョットは、こうした互酬の繰り返しを通じて第二帝政による支配が維持されてきたと分析した。皇帝は、国民の支持をつなぎ止めるために日々「積極的に行動」して恩恵を与え続けなければならず、政治的思考力を持たない国民は、自らの懐に、あるいは口に恩恵が転がり込むことが確認できるかぎりで帝政を支持する。質的な向上をもたらさない、生命体の単なる個体維持にも似たこの固定的な関係もまた、将来の政治的安定を保証しない。しかし、バジョットは、秩序の崩壊を幾度も経験してきたフランスでは、このような近視眼的な支配方式を通じてのみ政治秩序が成立すると考えたのである。

第四節　第二帝政の崩壊

「不信のシステム」は、皇帝と国民との相互依存によって成立していた。国民は無知であるため、すべての政治的判断を皇帝に委ねる。頭脳としての皇帝とそれによって生きる国民との将来的見通しなき一体化に支配のメカニズムがある、というのがバジョットの第二帝政論の核心であった。本節では、第二帝政末期の諸論考を中心に、このシステムの欠陥をめぐる彼の議論を検討する。

バジョットは帝政の崩壊後、後づけ的にその維持の難しさを指摘したわけではない。一八六〇年代の終盤に彼は、帝政の基本構造とも言うべき皇帝と―国民の一体性が弛緩しはじめていると論じた。バジョットによれば、自由帝政化の中、「［従来とは］異なるものを欲する……新たな世代が成長」して、帝政が「不人気」になりつつある（Bagehot［1869: 131］）[10]。ただし、新世代の登場も、自由帝政化の一層の促進により軟着陸が可能であり、むしろ、帝政の維持こそが、秩序の急激な破壊を防ぐ術だとバジョットは提言した（ibid., 132）。

議会への権限の委譲や出版・集会の自由が認められていった結果、労働者のストライキを軍隊によって鎮圧せざるをえない状況に陥ると、七〇年五月、ナポレオン三世は反帝政の動きを封じるために、自由帝政化の是非を問うという方法で国民投票を実施して権力基盤の回復を図った。結果は、賛成七三三万六千票、反対一五六万票、棄権一八九万四千票で、一八五一年の国民投票よりも大きな支持が表明された。この結果に皇帝は満足し内閣も安堵した（高村［2004: 119-20］；鹿島［2004: 547-8］）。

この結果に対しバジョットは両義的な評価を下した。たしかに国民投票によって農民を中心とした保守層の革命に対する危機感が表明され、ナポレオン三世の支配が承認されたかに見えた。しかし他方で、パリやマルセイユのような大都市のみならず、帝政支持基盤と見なされてきたボーヌのような中規模の都市でも皇帝に対する不支持の実態が明らか

になり、「非常に大きな、かつ脅威となる感情の変化」が表面化した。さらに「軍隊の規律」に多くを負う体制にもかかわらず、軍人のかなりの数の反対票と棄権によって、帝政に対する不満が「公然と表明され」、軍人たちの「感情の変化」もまた露わになった（Bagehot［1870b: 144］）。

このように六〇年代終盤には、皇帝と国民の一体性が弱まりつつある、とバジョットは見た。その流れを挽回するための自由帝政化は、帝政に対する批判の声を表面化させるという皮肉な作用を及ぼすこととなる。ただし、国民投票前と同じく、彼の判断では、世代の変化に適応する自由帝政化によって、皇帝の権限は減じるが、帝政の維持自体は可能であり、安定的な国民生活のためにはそれが望ましくもあった（Bagehot［1870c: 148］）。

しかし、自由帝政の流れは、七〇年七月の普仏戦争によって突如終焉することとなった。バジョットによれば、ナポレオン三世に対する見方を一変させなければ、この「突然の宣戦布告」を説明できない。

> 一連の行為を説明するなら、フランス皇帝に関する近年の見方のすべてを改め、貴重な政治家としての彼のこと、そして、何年もの間ヨーロッパの平和の管理人であり守護者の一人であったことを忘れる必要がある。その上で、クーデタに続く日々を思い起こさなければならない。当時ルイ・ナポレオンは、いかなる悪事をも計画し、いかなる犯罪にも手を染めることができるギャンブラー、ならず者であり、無断で他国を侵略し、彼自身やフランスのためだと考えるなら、戦争のしかるべき口実さえも必要としない人物だと見なされていた（Bagehot［1870d: 151］）。

「ギャンブラー」や「ならず者」という表現は、「クーデタ書簡」でも用いられている。つまり、ここからは、ナポレオン三世が「私的なゲーム」に興じる私人へと回帰したのだ、というバジョットの理解を読み取ることができる。エムス電報事件に至る一連の過程を経て生じたフランス世論の高揚に押される形で布告に踏み切ったのではなく、皇帝は「は

じめからプロイセンとの戦争を企図して」おり、スペイン王位継承問題は「口実」にすぎなかった。皇帝は、反対する議会を無視して、国民投票で反対票を投じた「兵士たちを喜ばせ、あるいは帝室を維持する」ことを目的とした「気晴らしのための」戦争に乗り出したのであった（ibid., 152-3）。

バジョットによれば、帝政崩壊をもたらしたフランスのあっけない敗戦の原因は、帝政のシステムそれ自体にあった。彼が注目したのは、「個人的支配」がフランス軍事組織に与えた打撃である。

> ［帝政の転覆は］カエサル主義の本質に理由があることには、まったく疑いの余地がない。それは、道徳的責任と人々の協力とを生み出す中間的な結節点の不在である。そのようなシステムは、必然的に王と国民との間にそれが生じる。国民投票の目的はまさにここにあり、皇帝に権威を与え、皇帝と対立する場合には、すべての中間的権力が取るに足らないものとなる。その結果、ありとあらゆるものが皇帝に依存しなければならなくなる（Bagehot［1870e: 156］）。

このような中間組織の無力化が普仏戦争で顕著に表れた。すなわち、「カエサル主義のシステムでは皇帝が軍隊そのもの」であるにもかかわらず、皇帝が全軍隊の指揮をすみずみまで執ることができるわけではなく、部下に指揮権を委ねざるをえない。しかし、皇帝のご機嫌伺いの術だけで出世してきた第二帝政下の軍人たちに軍隊の指揮能力はない。その結果、フランス軍の「団結精神」が破壊された。皇帝との個人的なつながりしか持たない軍の各組織は、こうして機能不全に陥った（ibid., 158）。

バジョットによれば、プロイセン軍は対照的に、軍内部の各組織が機能して、軍全体の質の向上をもたらしていた。

> 軍隊に対する国王の特別な個人的関与にもかかわらず、現実には軍隊を好むがままに動かす自由はなかった。軍の慣習と位階制の

> 力がプロイセンほど強く感じられる国はない。国王は常に貴族を通じて軍隊を指揮してきており、それによって、個人的な権力では対抗できないような団結精神が強力に保証された。……最新の科学的知見を採り入れてきたプロイセンの軍事部門の統治能力は、きわめて高い信用に値する。しかし、軍隊の長であるなしに関係なく、カエサル主義のシステムの下、一人の人間が行えることの限界がもたらす軍隊の質の低下ほど危険なものはない（ibid）。

皇帝の個人的支配の結果生じた中間組織の機能不全は、軍隊のみにとどまるものではない。第二帝政では、すでに行政組織全体の致命的な内部腐食が進行しており、普仏戦争の敗北は、帝政に対する最大のインパクトを発揮して、このことを暴露する事件となっただけである。[11]

ただし、右の問題がたとえ解消され、またプロイセンとの戦争が回避されたとしても、第二帝政がこの後も長期的に維持されたと考えることも、バジョットにはできなかった。第一に、先述したように、ナポレオン三世という特異な人物の「個人的支配」ゆえの後継者確保の問題があった。第二にバジョットは、別の後継者問題を指摘した。彼によれば、「フランスには知性が豊富にある」にもかかわらず、帝政期に優れた政治家がほとんど輩出されなかった理由は、「地位がいくぶん不安定な人にありがちな弱点、すなわち、非常に有能な人物、とりわけ政治家に対して嫉妬するという弱点」が皇帝にあるため、民衆が他の政治家に魅了されることに耐えられないことにあった（Bagehot［1873a: 163］）。皇帝の後継者の確保も、帝政を支える次代の政治家の出現も、個人的支配では期待できなかったのである。

むすび　フランス政治の将来

バジョットによれば、第二帝政は、政治秩序の継続に対する国民の不信から作り出されたナポレオン三世の「個人的

支配」であり、国民と皇帝との互酬関係によって両者の一体性を不断に再生することで維持された。不信ゆえに生じるこの「固定」的な関係に、議会が介在する余地はない。しかし彼は、帝政期にもフランスにおける議会政治成立の可能性を考察していた。そうした中、第二帝政のあっけない崩壊により、再び議会が主導権を発揮できる機会がおとずれた。本稿の最後に、バジョットのフランス議会論を分析する。バジョットの理解では、議会政治の成否は、さらなる革命の勃発や君主制への回帰、あるいは共和政の実現といったフランス政治の行く末を決定づけるものであったため、この作業によりフランス政治の未来に対する彼の見通しが明らかになる。

フランス議会についてバジョットが常に注目した論点は、同国における世論形成の問題ならびに、それを担うべき知識人や議会政治家たちの役割についてであった。ただし、このテーマをめぐる彼の力点は、帝政の動きの中で変化している。まずは自由帝政化が顕著になる前の六三年の議論である。彼によれば、議会の適切な機能は、世論が正しく形成されるか否かにかかっている。

> 議会政治は、討論によって命脈を保ち、自由な報道は論説と論文とによって生きる。本当に自由な国では、これらがきちんと機能して世論が形成される。世論は日々更新され、その時々の要請にきちんと対応し、継続的に学ぶことで偉大な原理を知り大問題を理解できるようにもなる。それゆえ、フランスのような国の場合、政府が世論に従うなら、改善をもたらさないわけがない。そうした政府は、進歩的で学ぶ意欲にあふれた指導者に従うゆえ、自ずから成長し学ぶことになる。しかし、フランスでは、そうした力学が働かない。議会は、フランスの大衆がほとんど気にかけず、ほとんど影響力を持たない影にすぎない（Bagehot［1863a: 91］）。

フランスで世論が影響力を発揮しない理由については、次のように説明される。

新聞が［政府に］反対の意を唱えようものなら、発禁の危険に身をさらし、経営者は破産の危機に瀕することになる。フランスの世論は、潜在的な力を持っているかもしれず、やはり実際に持っているのだが、改善をもたらすようなものではなく、表面的な動きもない（ibid）。

このように六三年には、バジョットは、帝政による言論の抑圧が世論のしかるべき機能を阻害し、それが議会の無力化の原因になっていると論じた。

六五年の論考でも、バジョットは同様の議論をくり返している。彼によれば、帝政下でも、「フランスの哲学的な思索は圧殺されることはなく」、「いまだに健全なのだが、もはや強力ではない」。その理由は、政府批判の言論活動が禁止されたことにあった（Bagehot［1865: 113］）。

ただし、同時にバジョットは、世論の形成が進まない理由の一端は、知識人が自らの政治的・社会的役割を理解していないことにあるとも論じている。すなわち、「パリの高尚な知識人」の「精巧な」議論は、大衆の「理解を超えて」いるため、大衆の非難の的にさえなっている。これに対して、世論形成に成功しているロンドンでは「不完全な諸思想」が入り乱れ人々の知性を満たすことで、「しかるべき影響を発揮している」（ibid., 112-3）。

自由帝政化が顕著に進んだ七〇年には、バジョットの批判の矛先はより明確に知識人に向けられた。彼によれば、議会の権限が大幅に拡大され、「イギリスと同様」の「民衆的な支配」体制へ移行したが、議会が主導権を握る見通しは依然として暗い。五年前と同様、知識人と大衆とのコミュニケーションが切断されたままだからである。その責任は知識人の側にある。リベラルもラディカルも、自由帝政化という望ましい動きの中で、「真の民主制論者であるなら」、民主政治の本質を見誤ってはならない。

民主政治は多くの場合、民衆の大多数の意に背いて民衆の名を自由に使うことにあるのではない、と思われる。……民主政治とは、大衆が知識人を統治するものであって、知識人が大衆を統治するものではない。後者は、実際、現在のヨーロッパでは、民主政治をめざす政党も共和政を支持する政党も表明していない教義である。愚鈍な人間も賢明な人間と同じく、雇われ農夫ももっとも鋭敏な哲学者と同じくカウントされなければならない（Bagehot［1870b: 145］）。

民主政治が右のようなものであるなら、知識人はなによりもまず、民衆の考えに寄り添わなければならない。

ラディカルの人たちは、もっと彼らと同郷の頭の動きの鈍い大衆に敬意を払うことを学ぶべきだ。あるいは、それができないなら、少なくとも、そうした大衆が彼らの見解を好ましく思っているかのように人権や民主的な意見を語ることを諦めるべきである。（ibid., 146）。

さらに、バジョットは「どんな国でも、もし一〇名中七名が根本的な変化に反対で、二名か三名が賛成なら」、そうした多数者の意見を出発点にして政治プランをくみ上げるのが民主政治だと論じて、民衆の要求を軽視し自らの政治的教義を押しつけようとする知識人たちを批判した[12]。ただし、世論は単に頭数を平等に「カウント」する多数決からは生じない。つまり、先の議論でバジョットが論じた民主政治と世論に基づく政治とは、直接的には無関係なのである。ここに、自由を最重要視するイギリス型議会政治にはない民主政治の大きな困難を彼は見ていた。

バジョットは、これらの議論を通じて、フランスにおける議会政治の成否は、知識人を中心とした議会勢力の政治的リーダーシップにかかっている、という認識を示した[13]。それが発揮されるためには、民衆が理解できない精巧な理論を用いて語りかけるのではなく、イギリスのように有権者層を巻き込んで、彼らの意見を組み入れながら世論形成を主導

していく政治的手腕が必要になる。指導者が自説の正しさを言い立て、非妥協的な対立を生じさせる傾向の強いフランスで、ナポレオン三世の個人的支配が議会政治の成立条件を一層毀損した。自由帝政化によって、制度面ではその条件が回復された。残された課題は、現実政治に対する知識人の向き合い方であり、彼らの主導によって世論をつくり出すことであった。

プロイセンに対する宣戦布告は、この議論の直後であった。そのため、自由帝政下の議会や知識人に対するバジョットのさらなる議論は、もちろんない。ただし彼は、七四年に帝政崩壊後の一連の経緯を受けて、「テューダー期」と同じ「顧問政治」がフランスにはふさわしいという最終的な結論を下した。彼によれば、「顧問政治」では、「自ら意志する君主」が決定し、国民は決定に対する「責任を感じない」ため、「世論」は形成されない。帝政期と同じく、知識人も政党も自らの役割を理解できず、「合意する用意のない諸党派」があいかわらず議会を占めているフランスの現状では、「自由な国制を作るなど、実際ほとんど政治的な奇跡」である。それゆえ、バジョットとしては、いずれ「多人数の国民を支配するための旧様式、すなわち、君主による行政の執行が第一位のもっとも強い権力になり、議会政治は弱体化して下位に置かれるような支配様式に交代するのは必然」だと予測せざるをえなかったのである（Bagehot［1874b: 173-7］[3]）。

このようにバジョットは、議会や世論形成の担い手となるべき知識人が本来の役割を果たせないことで、フランスは君主制に戻るだろうと論じた。この予測は外れることになるが、君主制支持勢力が多数を占めた第三共和政初期の議会を目の当たりにした彼は、そのように判断せざるをえなかった（Bagehot［1873b: 215-6］）。これらの議論から、フランス議会や知識人が、「不信のシステム」の維持に貢献したと見ることができる。世論が形成されないことそれ自体が、皇帝と国民との一体性を補強したのである。このような意味で、バジョットにとって一九世紀フランスの「カエサル」であるナポレオン三世の支配は、世論がなく適切に機能する議会も持たない国家の一つの政治的帰結であったと言える。ナポレオン三世という特異な人物による、秩序維持の先行きが不透明な「不信のシステム」は、議会や世論が弱体

だからこそ成立しえたのであり、さらに皇帝は、その状況を利用して支配の一層の強化を図ることができたとバジョットは考えたのである。

（1）バジョットは、クーデタの三日目、パリ市内で唯一戦闘らしい戦闘が行われ、市民約四〇〇名の犠牲が出た一二月四日、共和主義者たちとのバリケード造りに参加した。直後の二〇日と二一日に実施されたクーデタの信任投票では、賛成票が圧倒的多数を占めた（賛成七四三万票、反対六四万票、棄権一七〇万票）。翌年一月には、前月の国民投票で承認されていた新憲法を発布して、任期一〇年で国民投票による信任を可とし、大統領の権限を大幅に拡大した。この年の一一月、彼は国民からさらに多数の支持を得て（賛成七八二万票、反対二五万票）、皇帝ナポレオン三世となった。当時のフランス政治史については、以下の文献を参照した。野村［2002］；鹿島［2004］；高村［2004］。

（2）ヴィクトリア時代のイギリス知識人の政治理解に、フランス政治は大きな影響を与えていた。たとえば、二月革命前後の状況に対するJ・S・ミルの議論については、関口［1989: 405-11, 449-52］。また、このテーマについては、Varouxakis［2002］。英仏国民性の比較論に関するバジョットやその他同時代人の議論については、遠山［2011: ch. 1］；同［2017: ch. 1］。

（3）『バジョット著作集』の編者スティーバスは、バジョットのナポレオン三世論を時系列で丁寧に追っているが、著作集の解説のため、バジョットの議論を列挙して紹介するという性格が強い（John-Stevas［1968: 15-24］）。ヴァロクサキスもまた、第二帝政をめぐるバジョットの議論を綿密に論じている。しかし、国民性論の研究という同書の内容から、彼の第二帝政理解それ自体に分析が及んではいない（Varouxakis［2002: 86-102］）。これらの研究は、第二帝政の失敗に対するバジョットの理解を考察するという視点で共通している。しかし彼は、クーデタを条件つきとはいえ評価した。つまり彼は、先行き不透明だが持続している帝政のしくみを同時代人として探り出そうとした。本稿では、こうした視点に立ちバジョットの第二帝政論を分析する。マルクスのクーデタ論とも対比しつつ、クーデタや第二帝政に対するバジョットの両義的な評価を的確に捉えた議論として、添谷［1979］がある。ただし同論文は、バジョットの第二帝政論自体が主たる対象ではなく、第二帝政期の論考はほとんど扱われていない。

（4）本稿で論じるように、バジョットは、フランス政治について論じる際、「システム」という語を多用している。たとえば第一節の引用にあるように、それは、一定の政治的原理に基づいて形成される政治秩序ないしその構想を意味する。

（5）cf. Bagehot［1873: 81, 78］。添谷［1995: 244-6］。「『ロンバード街』における信用（credit）概念が『自然学と政治学』を土台にしていた、と考え」、バジョットの信用概念の分析を試みた研究として、山根［2005］。

（6）本稿で使用するバジョットの議論の多くは、彼が第二代編集長を務めた『エコノミスト』の論考である。六一年の編集長就任以来、彼の記事は毎週同紙に掲載され、時論的な性格が強い。加えて、記事の紙幅の問題もあり、状況の変化が激しい第二帝政をめぐるすべての論点が一つの論考で扱われたわけではない。そのため、本稿では、いくつもの論考をクロスリファレンスするという方法で彼の第二帝政像の把握を試みる。

（7）『代議制統治論』においてミルは、大統領と議会とが対立した場合に「クーデタ」が起きないためには、国民の「自由を愛する心と自己抑制の結合」が必要であり、これらの二つが機能することを期待するのは、「妥協の精神」が満ちていると想定することに等しいと論じている（ミル［1861: 334］）。政治体制と国民性との相関関係の認識は、当時のイギリス知識人の議論に広範に見られた（Varouxakis［2002: 83-6］；遠山［2011: ch. 1］）

（8）ナポレオン三世が若い頃から構想していた「民主的皇帝制」については、野村［2002: ch. 1］。

（9）『自然科学と政治学』では、F・ハリソンとビーズリーが、「イギリスの制度をフランス化する、つまり、ナポレオンのシステムの模造品であるプロレタリアートに基盤を置く独裁をこの国に導入しようとする世俗的なコント主義者」として批判されている（Bagehot［1867-72: 50, 71-2］）。

（10）バジョットは、「様々な変化を生み出す根源的変化」として、世代変化を重視した（Bagehot［1865-7, 72: 166, 302-3］）。

（11）さらにバジョットは、「民衆のうちの大多数の願望」の実現に支えられる「カエサル主義のシステム」では、「徴兵制」を強化できないという軍事上の弱点を指摘している（Bagehot［1870e: 159］）。

（12）別の論考でもバジョットは、「民衆よりも民衆の考えを持っているという理解は、民主的な諸政党に共通する誤りだ」と論じている（Bagehot［1870c: 148］）。

（13）一方ミルは、自由帝政化の中で「フランスの自由の精神」の復活を喜び、新世代の知識人たちに対する期待を表明している（Varouxakis［2002: 82］）。

（14）cf. Bagehot［1870f: 185-6］。

【凡例】

・引用文中の括弧［　］は筆者による補足である。

・引用文中の傍点は、原文イタリックの箇所である。

・原書と訳書の両方を参照したものについては、原書、訳書の順で頁数を記した。

【文献一覧】

Bagehot, W 1865-7, *'72 The English Constitution, The Collected Works of Walter Bagehot*, No. V, ed. by N. St John-Stevas, The Economist〔『イギリス憲政論』『バジョット ラスキ マッキーヴァー（世界の名著六〇）』所収、小松春雄訳、中央公論社、一九七〇年〕。以下、Worksの巻数および初出年のみを表記。Worksの出版年は、一九六五―八六年。

――1867-72 *Physics and Politics*, VII〔『自然科学と政治学』大道安次郎訳、岩崎書店、一九四八年〕。

――1873 *Lombard Street*, IX〔『ロンバード街――ロンドンの金融市場』宇野弘蔵訳、岩波文庫、一九四一年〕。

――1852 'Letters on French Coup d'Etat of 1851', IV.

――1863 'France and England', IV.

――1865 'Caesareanism as it now exists', IV.

――1867 'The Mercantile Evils of Imperialism', IV.

――1869 'The Gravity and Difficulty of Affairs in France', IV.

――1870a 'The Emperor's Proclamation', IV.

――1870b 'The Lessons of the Plebiscite', IV.

――1870c 'The Liberals and the Emperor', IV.

――1870d 'The Declaration of War by France', IV.

――1870e 'The Collapse of Caesarism', IV.

――1870f 'Do the Conditions Requisite for a Stable Government Exist in France', VIII.

――1873a 'The Emperor Napoleon', IV.

――1873b 'The Ultimate Evil of French Politics', VIII.

――1874a 'The Prospects of Bonapartism in France', IV.

――1874b 'Why an English Liberal may look without disapproval on the progress of Imperialism in France', IV.

鹿島茂 2010［2004］『怪帝ナポレオン三世――第二帝政全史――』講談社学術文庫。

関口正司 1989『自由と陶冶――J・S・ミルとマス・デモクラシー』みすず書房。

添谷育志 2015［1979］「現代英国政治思想の系譜（一）――政治の象徴劇――クランストンからバジョットへ」『近現代英国思想研究およびその他のエッセイ』風行社。

――2015［1995］「バジョット――権威・信用・慣習――」同前書。
高村忠成 2004『ナポレオンⅢ世とフランス第二帝政』北樹出版。
遠山隆淑 2011『「ビジネス・ジェントルマン」の政治学――W・バジョットとヴィクトリア時代の代議政治』風行社。
――2017『妥協の政治学――イギリス議会政治の思想空間』風行社。
野村啓介 2002『フランス第二帝制の構造』九州大学出版会。
J・S・ミル 1997［1861］『代議制統治論』水田洋訳、岩波文庫。
山根聡之 2005「バジョット『ロンバード街』における信用」――『自然学と政治学』との関連から――」『一橋論叢』第一三四巻第六号。
John-Stevas, N. St 1968 'Walter Bagehot and Napoleon III', IV.
Varouxakis, G 2002 *Victorian Political Thought on France and the French*, Palgrave.

〈付記〉本稿は「科研費補助金・基盤研究(C)課題番号18K01431」の研究成果の一部である。